



# 塩の道 Walk

ご存知の方も多いと思うが、糸魚川から松本城下までの約120km「千国街道」は、「塩の道」と呼ばれている。小谷村観光協会のパンフレットによると、松本藩では、他からの塩の移入を禁止し、この街道のみを許可したため、そう呼ばれるようになったそうだ。

7月19日大手公民館の企画で、塩の道の「石坂越えコース」を、小谷村の歴史や自然への想いが篤いガイドさんの案内で巡ることができた。

姫川沿いは、洪水で流される可能性が多いため、道は山腹を巡っていて、険しい登り下りも多い。この道を、ガイドさんによると、「歩荷」と呼ばれる人たちは、50kg以上の荷を背負って運んだそうだ。

ガイドさんは、途中、珍しい植物を紹介してくれた。その中には、以前に村で栽培さ

れていた「楮」という和紙の原料になる木もあった。

人口約2,900人の村では、作物を鹿・猪・猿から守るため、畑の周りを電流が流れる柵で囲んである所が多く驚いたが、その仕事を業者さんが行っているところにも出会えた。

ガイドさんは、「この家にも、お祖母さんが独りで住んでいらっしゃるですよ。」という家を何件か教えてくれた。小谷村の女性性は、強い。

今年熱海市伊豆山、またお盆の時期の長雨による岡谷市をはじめ、日本各地で土石流による痛ましい被害が生じている。小谷村でも、明治48年に榑田山の崩落による土石流が、姫川の流れを塞ぎ止め、水は3km上流の集落まで達したそうだ。その事を、昭和52年に作家の幸田文さんが雑誌「婦人の友」に「崩れ」として発表しているそうで、その受難者の鎮魂を祈願した文学碑が今回のコースの終点だった。出発から約3時間半、



幸田文 文学碑にて

その後、道の駅で飲んだ生ビールは、疲れを吹き飛ばす甘露だった。もちろん、感染防止の為、黙食を心がけてのささやかな宴にて終了となった。

小柳町 飯沼 美千子

夕方になると一部の人達が山に逃げているという話が広まり、街中が一斉に身の回りの物をまとめ山へ向かう準備を始めた。夜暗いなか、家財道具や衣類、また家畜までを担いだり、荷車やリヤカーに載せて山の方に黙々と歩いていく。町に隣接していた航空隊(出水海軍航空隊)の隊員も一緒に歩いた。眠気を取ってお茶の入ったお菓子をもらって食べながら歩いた。

(T・M)



## すいかわり

8月3日、公みん館ですいかわりをしました。

わたしは、すいかをわりました。だけど、それは、お兄ちゃんのおかげだと思えます。

なぜかは、ほほほ、お兄ちゃんがわっていたからです。

すいかをわってうれしかったし、すいかがおいしかったです。

(南土井尻町 下澤ゆりか)

山深い母の知り合いの家に着き泊めてもらった。その人達は「山を越して米兵が来る」と言ってさらに奥の方へ逃げていった。

夜が明け日も高く上がった頃、家にいた祖父が自転車でやってきた。もともとあまりしゃべらない祖父はただ様子をみてうなずいていた(祖父は今更そこらあたり逃げても仕方のないとの考えだった)。

私たちの家族は何事もなかったかのように我が家に帰った。

その後、街に隣接した飛行場は進駐軍が駐留することになり、米兵を見るのは日常となった。

こどもたちが遊んでいるとジープでやってきた米兵がニコニコしながら手招きし、みんなにチョコレートやお菓子をくれた。美味しかった。当時は戦後の食糧難でみんなお腹を空かせていた。

またある時は、街の本通りで米軍のタンクローリーが出火し、爆発の危険性からその周辺の住民は避難することになった。大事に至らなかったが、自分の命も顧みない必死の対応が話題になり、米兵への感情は時が経つにつれて良くなっていた。

## 長元坊 チョウゲンボウ

追憶 終戦の頃

76年も経った昔の話である。

正午、ラジオの玉音放送を家族みんなで聴いた。みんなただ茫然、静かにそれを受け止めているようであった。

それから時間が経つにつれ、いろんな噂が飛んだ。皆殺しになるといったぐいの話である。

夕方になると一部の人達が山に逃げているという話が広まり、街中が一斉に身の回りの物をまとめ山へ向かう準備を始めた。夜暗いなか、家財道具や衣類、また家畜までを担いだり、荷車やリヤカーに載せて山の方に黙々と歩いていく。町に隣接していた航空隊(出水海軍航空隊)の隊員も一緒に歩いた。眠気を取ってお茶の入ったお菓子をもらって食べながら歩いた。

# 町会紹介 鷹匠町

が町「鷹匠町」である。

町会の北東には国宝開智学校、南東には国宝松本城と二つもの国宝のお膝元で文化と伝統を肌で感じとれる町だ。江戸時代には、城主から鷹をお預かりして、鷹狩の為に訓練と飼育を任されていた鷹匠の屋敷があった故の由緒ある町名であり、今も直系の方々が住んでいる。

中央地区に属してはいるが、観光商業地や官公庁街と言った趣は全く無い。公立や私立の三つの幼稚園と開智小学校そして中央図書館に囲まれている閑静な文教住宅地であり、中央地区の中では異質な町会である。ただ、

生鮮食品や生活用品の商業施設こそ隣接していないので、車を持たない方は、タウンスニーカーで大いに助かっている。ご多分に漏



ようこく市の様子  
(令和元年5月撮影)

松本城の北側から西側にかけて隣接している町が、私が愛して止まない「わ

れず鷹匠町も、少子高齢化現象に伴い、空き家とコインパーキングなどの駐車場化が進んでいる。三年前からは、お城北側の四町会と地区公民館等の共同開催で、今井と四賀地区の農家さん達の協力を得て、「ようこく朝市」と銘打って松本神社境内で行っている。

新鮮野菜や果物そして加工食品などを、五月から十一月まで第四日曜日に開催している。そこでは、「よつてきま処」と名付けた無料休憩所を併設して、買い物住民の方や観光客の方と出店の農家さん達との間で、和気あいあいと消費者と生産者の温かい交流で盛り上がっている。

ただ大変残念なことに、コロナの感染拡大で大いに水を差されてしまった。このコロナ問題が解決した暁には、以前の様に綿あめのプレゼント等を復活して、子どもたちから爺ちゃん婆ちゃんまでの三代交流の場として、大いに盛り上げて地域の絆を強めていきたいと考えている。

鷹匠町町会長  
中田 充

## 日赤奉仕団視察研修



令和3年7月、赤十字奉仕団中央分団は視察研修で『満蒙開拓平和記念館』（下伊那郡阿智村）を訪ねました。館長さんより、施設や満蒙開拓事業について概要説明を伺いました。長野県から移住した人数は全国一の3万7千人余りで全国総数約32万人の1割強を占めており、現地の死亡者約1万5千人、置き去りにされた人は1千百余人というあまりに痛ましい数字に驚きました。

このあと、館内の展示資料などを見て回りました。当時の時代背景や満州での開拓団の生活の様子、敗戦と同時に凄惨を極めた逃避行、収容所生活の実態、そして満蒙開拓体験者が語る記憶、引き揚げから戦後も続く再開拓の苦難など、いずれも過酷な現実を目の当たりにします。

期待に胸膨らませて渡った満州の地は、開拓と同時に国境警備の役割を担わされていたのです。戦局が悪化し、取り残された女性・子ども・高齢者ばかりの開拓団は、ソ連軍や現地人の襲撃を受け集団自決に至る。住民が戦争に巻

き込まれた沖縄と重なる光景が満州でもあった。なぜこのような悲劇が起きたのか。若い人には是非訪れてほしい場所だと思えました。

満蒙開拓平和記念館から近くの、武田信玄終焉の地として知られる『長岳寺』も見学しました。この寺のご住職故山本滋昭氏は、中国残留孤児の帰国支援活動に尽力されました。

午後は飯田市内へ移動し、伝統の水引細工の制作を体験しました。皆さん、熱が入って時間を忘れるほどでした。

(鷹匠町 桃井 栄一)



満蒙開拓平和記念館にて



黙々と水引細工体験

## 中央地区の樹木⑦

サルスベリ

中国南部の原産で、庭木として各地に植栽されている落葉高木。樹皮は赤かつ色、平滑でつるつるすべり。

サルスベリは百日紅の名でよく知られている。樹皮に由来して付けられた名がサルスベリ、花に由来した名前が百日紅である。上原敬二著『樹木大図説』には、これに関する朝鮮の伝説が掲げられている。

水難防止のため毎年娘を竜神に捧げるのだが、ある年、長者の娘がその選に入り、竜神の来るのを待っていると偶然にも、その国の王が来てこの話をきき、王子は竜神を征服し娘と相愛の仲となった。

しかし王子は、ほかに行くべき使命があったので、百日後を約して去った。娘はこの百日を待ちきれずに死んだので、百日目に現れた王子は非常に悲しんだ。そこで遺体を埋めたところにはえたのが百日紅で百日の間花が咲き続けているという。

抜粋：岡本宣彦著 『標準原色図鑑全集第8巻』



松本城公園のサルスベリ